万葉集と考古学・雑感

遠藤　宏

今や恒例となっていることなのだが、「アサヒグラフ」誌は年末になるとその年一年間の主な考古学上の成果を特集する。ここ何年かは、誌上に掲載されている写真を見ながら、新聞紙上に報道された時の興奮を蘇えらせたり改めて目を見覚ったりして楽しむのが、年末の私の恒例になっている。本稿を記している昭和六十三年一月の時点で言えば昨年末になる約一か月前にも例外ではなかった。

私の専攻している上代文学においては、文字資料が他の時代のそれに比して極めて少いということもあって、どうしても考古学側の成果に目配りを利かせなくてはならなくなるのである。考古学と古代歴史学とは一体と言ってよいほど密接な関係にあるというのは自明に近いことだが、上代文学においても、考古学の恩恵を直接あるいは間接に大きく蒙っている。知られた例だが、鮮かな事例を一つ挙げておこう。

天武天皇の皇女但馬皇女は異母兄高市皇子の宮に居ながら（恐らく妃の一人として）、異母兄の穂積皇子と道ならぬ恋に落ちた。高市皇子が没した持統天皇の十年（六九六）以後、二人は晴れて結ばれたのではないかとも想像され、また結ばせてやりたいとも思ってしまいがちである。しかし、そのような想像あるいは願望は成立しがたいのである。「多治麻内親王宮」から典薬寮に薬を多量に請求している木簡が藤原宮跡から出土したからである。この木簡によれば、但馬皇女は高市皇子没後、宮家を立てていたわけで、穂積皇子との関係が仮に続いていたと仮定しても、少くとも同居はしていなかったことになって、晴れて一緒ということにはならないからである。穂積皇子は皇女の没後、彼女の墓を望見し悲傷流涕して

降る雪はあはにな降りそ吉隠の猪養の岡の寒からまくに（巻二・二〇三）

と詠じている。この歌に対する理解は、二人が同居したことを前提とするか否かによってかなり異ったものになる。その点でも先掲の木簡は大きな意味をもっているということになる。

右木簡が出土したのはもうだいぶ前のことになるのだが、昨年の発掘成果はどうだった

であろうか。私の個人的な価値評価に基いて印象に残るものを挙げてみよう。先ず、吉野宮滝の吉野離宮址（五月）、桜井市上之宮の上宮遺址（九月）、明日香村島庄庭園遺址（十一月）、藤原鎌足(?)の墓（十二月）となる。これに本年一月のものも加えれば、流山市の稲荷台古墳出土の鉄剣銘、平城京址の長屋王邸ということになる。

吉野離宮址発掘調査報告の報道は東京方面にはほとんど行われなかったようだが関西では大きく採り上げられたもので、離宮は恒常的建物として平安時代に入っても存続していたことが確認され、常駐の留守番役の官人用と思われる建物遺構も存するというものであった。行幸のある度に仮りの建物を急造していたのであろうという程度に漠然と考えていたのは誤っていることになる。持統天皇は在位十一年の間に三十一回の吉野行幸を行っている。一年平均三回弱という頻繁さであるし、歴代の天皇にも吉野行幸はあるのだから、発掘結果は、考えてみれば当然のことではあるのであるが、当然を当然と思わせないところに今回の発掘の凄さがあると感じられてくるのである。柿本人麻呂の持統天皇吉野行幸従駕の作に

吉野の国の　花散らふ　秋津の野辺に　宮柱　太敷きませば（巻一・三六）

という一節がある。離宮が最初から本格的な宮殿として建てられたのかどうかはわからないのだが、右の一節など、天皇讃美のための単なる文飾ではなかったのであろうと思うに至るのである。

島庄遺址は、蘇我馬子の墓という伝えのある石舞台古墳の至近位置に在り、石舞台も含めて付近一帯はこれまで何回も発掘調査が行われたところで、今回は庭園遺構の発見ということになったのである。間もなく埋め戻すということを伝え聞いたので、丁度都合よく開かれた京都での学会を利用して（と言ってしまっては学会に申し分けないのだが）、参じた。島庄は、二十八歳の若さで没した皇太子草壁皇子の邸宅が在ったところで、園遺構も皇子邸のものと考えられる。柿本人麻呂が、皇子への挽歌に

島の宮勾の池の放ち鳥人目に恋ひて池に潜かず（巻二・一七〇）

と歌っているのだが、その「勾の池」がビニールシートの覆いからはみ出て、その一部が見えた。シートをめくって（少々）みたところ、まさに勾の池であった。曲水の宴用と想定される蛇行した池は平城京址からも既に発掘されていて、現在は側の建物ともども復原されている。今回見出された長屋王邸の東南すぐ近くにあり、所有者名は不明だが皇族級の高位者の邸と推定されているものである。勾の池を目にした時、自然とその平城の池と比較してしまったのだが、いささか小規模で放ち鳥の可能性も少々危ぶまれるくらいではあったのだが、作品の現場が眼前にあるということだけで十分ではあった。ウソは歌っていないなと一応は確かめられたことも嬉しいものであった。

考古学の成果というものは、出土しないうちが花とでも言えるような臆測や推定を瞬時に砕いてしまう厳しくもまた恐ろしい存在なのだが、逆に推定の正しさを証明してくれる頼もしくもまた楽しい存在でもある。理窟としてではなく実感としてそのように思われる。

昨年の考古学と万葉集の間柄は従前同様に密であったと言ってよいであろう。

なお、藤原鎌足の墓としてセンセーショナルに報道されたものは、どうも鎌足の墓ではないらしい。津々と興味を喚起する話だが、後日を期すことにしたい。